

# 子どもとじっくり向かい合い

## 自由に語り、学べる職場づくりを

# さいたま市教組新聞

編集・発行/  
さいたま市  
教職員組合  
〒330-0843  
さいたま市大宮区  
吉敷町4-93-5  
大宮教育会館2F  
TEL 641-6763  
FAX 648-3567  
2012.4.18(水)  
No.192

余裕ない年度初め  
「205日」本格実施

新年度が始まって2週間、新学期が始まって1週間が過ぎました。「なんと忙しい年度初めなのか」。これが見なさん共通の思いではないでしょうか。

昨年度、さいたま市は授業日数を205日にしました。3月11日の東日本大震災で夏休みの短縮は実施されませんでしたから、今年度が授業日数205日の本格実施の年になります。



執行委員長 山本 仁 氏

余裕など生まれません。実際、この春休み、学期はじめの準備で連日学校に行き、仕事が終わらず、勤務時間が終わっても仕事をしている教職員が多くいました。今、学校の先生は日々駆け足で仕事をしています。身を削り、心をすり減らして仕事をしている状況をなんとかしても改善しなければなりません。

### 競争で急かされる子どもたち

忙しいのは子どもたちも同じです。急かされています。「ちよつと待って」「考えさせて」「間

違えても大丈夫だよ、と言つて」と子どもたちがつぶやいていませんか。競争の教育にストップをかけないと子どもたちの成長にゆがみが出ないでしょうか。

春休み中に担任の先生に手紙を渡そうと新2年生が学校に来ました。窓口で担任が異動して他の学校に行つてしまつたことを聞いたその子の目が潤んできました。

子どもにとって先生の存在はなんて大きいのでしょうか。

### 子どもとつながり、語り合う存在に

始業式で担任の発表に歓声をあげる子どもたち。拍手をして自分たちの列の前に立つ先生を迎えています。

子どもたちとつながる大事な人、人間として子どもたちと日々つながり、語り合うのが先生です。そして思っている以上に子どもたちの人生に影響を



及ぼしているのが教育です。

### 向かい合い 対話する大切さ

先日、あるテレビ番組で35歳にして職を辞し、バイオリン作りの道に飛び込んだ日本人の存在を知りました。

現在、イタリア在住で世界有数のバイオリン職人となった菊田浩さんです。

彼はイタリアのバイオリン製作学校を主席で卒業し世界屈指のバイオリン職人のニコラ・ラザーリ氏の工房で修行します。

そして工房で初めて製作したバイオリンを見たラザーリ氏の言葉は、「設計図通りよくできていますが、これはバイオリンではない」でした。この言葉にひるむこともなく師のバイオリン製作を見続けます。

そして気づきます。師は板に引いた設計図の線

の通り削っているが、そのうち線を消して製作することを。

木と対話しながら作ることで美しいバイオリン、すばらしい音色のバイオリンが生まれることを。「木と対話しながら」。私は教育に通じることだと思えます。

マニュアル通り教えれば良い授業、良い教育になるのではない。子どもは一人ひとり違います。子どもと対話しながら、子どもとしっかり向かい合いながら授業をし、学級経営をすることが大事だと思えます。

尾木ママこと教育評論家の尾木直樹さんが雑誌「クレスコ」で「教師の仕事は、なんといいても、目の前の子どもとどう向き合つかが勝負」だと述べています。

自由で創造的な実践できる職場に

そして「教師が自由であること」も大事だと述べています。

みなさんもきつと今まで、褒めたり、叱ったり、手を取って教えたり、一緒に遊んだり、本気になつて子どもととりくんで

たはずです。

そして息苦しい管理と統制の職場でなく、自由にものが言えて、教職員が語り合い学びあえる職場のなかで、「じっくり子どもと向かい合った実践」を創造してきたのだと思えます。

### つながり、変える 市教組に加入を

さいたま市教組は「働きやすい職場づくり」「確かな学力と子どもの笑顔がいっぱいの学校づくり」「教職員の生活と権利が守られる環境づくり」のために、とりくんでいきます。

この1年、よろしくお願ひします。

また、心からみなさんの市教組への加入を訴えるものです。

